【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	京都府

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	京都市立松陽小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	3	3	1	19	26
児童数	114	99	108	115	82	97	3	618	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「自ら問い続けることができる子」

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・全学年・算数科
生きる力を,「豊かな人間関係の中で自ら問い続けることができる力」と捉え, その力を育むために必要な力として「問題解決力」「情報活用力」「コミュニケーション力」「自己評価力」の４つを挙げている。それらの基礎・基本となる学力の定着と向上を図るため, 算数科を核として, 図書館教育, 総合的な学習との学びの関連を図りながら取組を進める。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度

○テーマ　　算数科　　解く楽しみ, 発見の喜びを持つ子
―　指導と評価の一体化による子どもの側に立った授業の創造　―

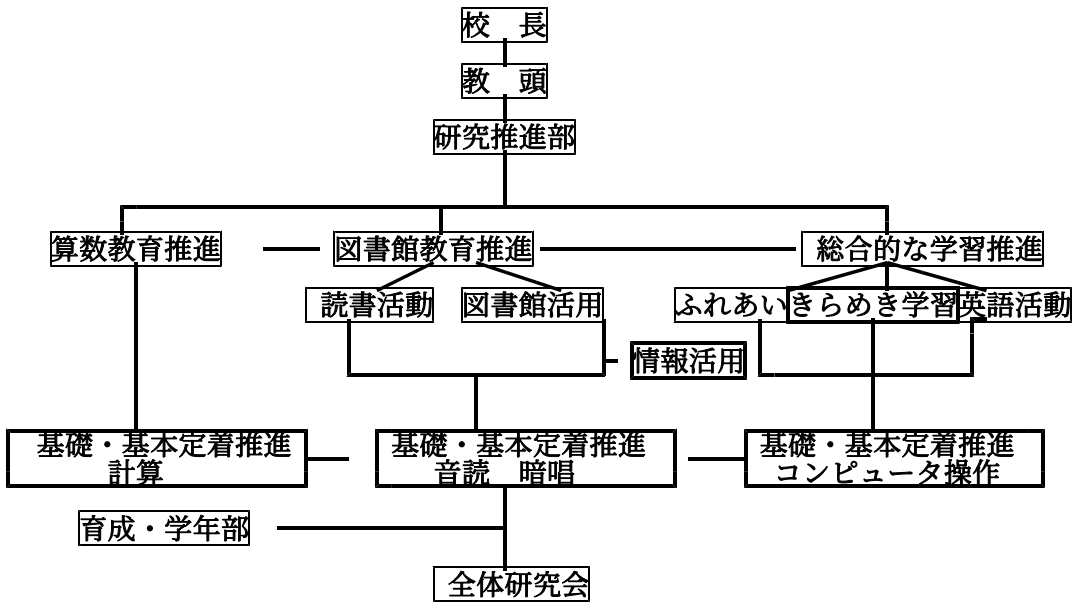
○研究の見通し（仮説）
・既習の知識や経験を駆使して問題を解決しようとする時, 個の分かり方に応じた指導（○つけ法）を工夫することによって,子どもが「分かる,できる」喜びを味い, 基礎・基本を確実に獲得していくであろう。
・自分の考えを相手に分かるように説明し合う場を設定し,考えを共有したり明らかにしたり深めたりする指導（復唱法）を工夫すれば,「共に考える楽しさ」を味わいコミュニケーション力の基礎を培うことができるであろう。
・学習したことを自分の言葉でまとめることにより, 獲得した知識や技能, 学び方や考え方を自分のものとして次に活用していこうとするであろう。また, 自分の成長に気付き自己を肯定しながらより高まっていこうとする力を育むことができるであろう。

○研究の内容・方法
１　内容
（１）ねらいと評価規準の明確化
・単元のねらいと観点別評価規準から, 指導計画と毎時間の具体の評価の視点を明らかにし, 評価方法の設定をする。
・レディネステストやアンケート実施により実態把握をする。
（２）子どもと共に創る授業（指導と評価）
・既習と未習との接点を明らかにし, 問題提示の仕方を工夫する。
・解決のステップ毎のポイントを見極め, 子どもの反応やつまずきを予想してヒントや補充問題, 発展的な内容の問題を準備する。
・○付けのポイントを考えて, 視点がより明確になるようなワークシートを工夫する。
・○つけ法（愛知教育大学　志水廣教授が提唱されている）により個々の状況を瞬時に把握し○を付けると共に個に応じた声かけをする。即時評価・即時指導と授業展開の工夫をする。

	・復唱法（同じく志水廣先生が提唱）で子どもの考えを受け止め，学習集団で考えを共有することから，お互いの思考のずれや曖昧な点を明らかにしたり，確かなものにしたり深めたりする。 ・分かったことを子どもの言葉でまとめる「学びの引き出し」の活用 （３）指導形態の工夫 ・T.T 指導，均等・均質少人数,習熟度別少人数，課題別少人数,興味関心別少人数などをどの単元でどのように取り入れることで効果を上げることができるかを見通し実践する。 （４）基礎・基本タイムでの計算検定の実施 ・四則計算を中心に計算力アップを図り，授業に生かせるようにする。 （５）図書館教育との関連による取組 ・論理的な思考力や表現力を支える言葉の獲得。 ・問題の場面をイメージし題意を読み取る力を育てる。 ・詩の暗唱により，暗記の方法の獲得と合わせて，脳の活性化を図る。 （６）補助簿の活用と評定 ・目標に準拠した評価の方法やよさを引き出す個人内評価の在り方をさぐる。 （７）毎週水曜日の学習相談日の個別指導 ２　方法 ・学年会，研究推進部会での日々の授業実践の交流，公開授業や模擬授業，○つけ法，復唱法の研修会を通して，組織としての授業力アップ目指す。 ・全国的かつ総合的な学力調査の実施に係わる研究指定で単元毎の目標の実現状況を把握し，成果や課題を捉えながら研究を進める。

平成16年度	○テーマ　　算数科　　解く楽しみ，発見の喜びを持つ子 ―　指導と評価の一体化 による子どもの側に立った授業の創造 ― ○研究の見通し（仮説） ・既習の知識や経験を駆使して問題を解決しようとする時，個の分かり方に応じた指導（○つけ法）や学習形態を工夫することによって,すべての子どもが学ぶ喜びを味い，基礎・基本を確実に獲得していくであろう。 ・自分の考えを相手に分かるように説明し合う場を設定し,考えを共有したり明らかにしたり深めたりする指導（復唱法）を工夫すれば,「共に考える楽しさ」を味わいコミュニケーション力の基礎を培うことができるであろう。 ・学習したことを自分の言葉でまとめることにより，獲得した知識や技能，学び方や考え方を自分のものとして次に活用していこうとするであろう。また,子ども自身が目標を設定することで自分の成長に気付き自己を肯定しながらより高まっていこうとする力を育むことができるであろう。 ○研究の内容・方法 １　重点的な内容 （１）観点別評価の視点や評価方法，評価システムの具体化 （２）基礎・基本の確実な定着を図る個に応じた指導方法や指導体制の工夫 ・○つけ法を生かした指導と評価の工夫 ・習熟度別少人数指導の効果を高める取組 ・補充問題や発展問題の開発 （３）復唱法を生かした指導展開の工夫 ・話す力，聞く力を育て，共に高め合う学習集団づくり （４）基礎・基本タイムでの計算検定の実施 ・四則計算を中心に繰り返し学習による計算力アップ （５）学力の実態を把握する調査の実施と分析 ・自作単元末テストやミニテストの内容の充実 ・京都市の教育課程実施状況把握調査の集計と分析 （６）学習相談日の個別指導の充実 ２方法 ・学年会，研究推進部会での日々の授業実践の交流，公開授業や模擬授業，○つけ法，復唱法の研修会を通して，組織としての授業力アップ目指す。す。 ・全国的かつ総合的な学力調査の実施に係わる研究指定２年次として,１５年度の課題を踏まえた取組を進める。

(3)　研究推進体制



・算数教育・図書館教育・総合的な学習の各推進部は各学年１名と学校長・教頭・教務, T.T 教諭, 少人数担当で構成する。
・全員が学年のそれぞれの研究推進のリーダーとなることで，組織としてのモチベーションを高めていく。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

○指導方法の工夫
・特に基礎学力を付ける取組に力を入れてきて成果があった。
・基本・適応・発展の３ステップの学習ノートを工夫することにより，子ども自らが進んで取り組むようになってきた。
・○つけ法でどの子にも目を向け声をかけることで，個に応じた指導ができた。また，子どもは発表にも自信が持て，また２つ目３つ目の課題にはより工夫して簡潔に書こうとする。
・○つけ法や復唱法によって子どもの思考過程にきちんと目を向け耳を傾けることを授業づくりのベースにすることができ，温かい空間の中で分かり合う喜びを感じることができた。
・集団解決の場で，自分の考えを発表し，自分の考えと友達の考えを比べ，同じ考えに共感したり，異なる発想のよさに気づいたりすることができた。
・子ども自身がその時間の学習記録を残すことで，教師の気付かなかった子どもの思いを知ることができた。また，子どものつまずきを見つけたり，理解度を確認したりすることができ，次の授業のポイントや展開の工夫を考えるのに役立った。
○学習形態の工夫
・学年の実態や単元の特性からいろいろな学習形態を試みたが，いずれも個に応じた指導がきめ細かくできた。また，ふだんなら発表しにくい児童も，説明したり質問したりするなど意欲が高まった。
・習熟度別指導では，ゆっくりコースと基礎コースを設定したが，進んで家庭学習をするなど，意欲が高まった児童もいる。
・ゆっくり学習することで，自分で課題解決しようとする児童が増えてきた。
・ゆっくりコースを複数の指導者で担当するなどの工夫をすることで分かる児童が増えてきた。
・初めはコースの選択が適切でなかった児童もいたが，ほとんどの児童が適切なコース選択ができるようになった。
○朝の計算タイム
・九九の１００ます計算や掛け算や割り算など習熟を図ってきた。一定の力を伸ばすことは出来てきた。

・計算を使うことの良さに気づき，問題解決的な学習をはじめ，生活の中でも進んで活用するようになった。

２．今後の課題

○指導方法
・ポイントを押さえたテンポよい授業，予想外の反応に瞬時にうまく対応できるための教材研究
・楽しんで学習に入っていけるような教材や教具の開発
・学習のどの段階で「○つけ法」を取り入れるかを考え，思考段階にあわせたプリントを工夫するなどして，児童一人一人が「わかった」「楽しかった」といえるような授業の工夫する。
・個に応じた指導のための補充的な問題や発展的な内容の開発。
・復唱法等を活用し,解決に至る過程を交流させる中で解決の要素を見つけやすくする。また,式と場面と具体物の操作を結び付けながら人に説明する力を育てる。
・子どもの分かり方を子どものことばで説明し合い，復唱することで曖昧さが明らかになる。子どもの考え方に沿いつつ核心に迫っていけるような授業を組み立て,コミュニケーション力を育てる中で分かる授業を目指す。
○授業形態の工夫
・ＴＴ指導や習熟度別の少人数指導の工夫。
・実態に応じて「ゆっくりコース」「基礎コース」だけでなく「発展コース」など習熟度別のコースの設定の工夫をする。
○計算タイム等で基礎・基本的な計算を確実なものとし，日常生活の中でも適切に用いられるようにする。
○１年間の授業の記録や学習資料を次年度の学習に生かせるように，保管や引継ぎをする。
○学力を把握するための調査を実施し，客観的なデータをもとに成果と課題を見極める。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

＊基礎・基本として「全校計算検定」を年間３回実施。実態把握と分析をして四則計算力の向上を目指す。
＊観点別評価の問題や発展的な内容を盛り込んだ単元末テストの開発と実施。
＊京都市教育課程実施状況把握調査の集計と考察。
＊全国的かつ総合的な学力調査の実施に係わる研究指定による単元毎の実現状況の集計と考察

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

＊平成１５年１２月５日（金）研究発表実施。
・全学級公開授業と研究発表
＊ＨＰを作成し,研究の取組を発信
＊重点単元の指導案,授業実践記録集を作成。電子媒体により他府県,京都府市内へ発信。
＊フロンティアネットワーク校や他府県からの視察校との交流

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑ １５年度からの新規校　□ １４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級　□１３～１８学級　☑１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導　□ 一部教科担任制　□ その他

【研究教科】　□ 国語　□ 社会　☑ 算数　□ 理科　□ 生活　□ 音楽　□ 図画工作　□ 家庭　□ 体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　□ 無